

第40回応用言語学講座公開講演会：文法の変化

後援：国際言語文化研究科教育研究プロジェクト経費

（「言語学・応用言語学研究者養成のための講演会・チュートリアル実施プロジェクト」）

第一部講演

日本語シカ・ダケの成立と文法変化：名詞から副詞句・焦点句構成へ

講師：宮地朝子先生（名古屋大学大学院文学研究科 准教授）

日本語は奈良時代以来の豊富な文献資料を持ち、歴史的変化の様相を記述的に把握できる言語である。たとえば、現代日本語の限定を表す助詞シカ、ダケは古代語に見られない歴史的には新しい形式である。本講演では、そのような“新しい”機能語が確立展開する過程を観察し、日本語の構造的特質を把握しようとする文法史的研究、なかでも名詞の文法変化を扱う事例としてシカ・ダケを取り上げ、文法変化において語彙的意味がどのように関与するか、また日本語のどのような構造的特質が変化の支えとなるかを考察する。主に名詞「丈」から派生、文法変化したダケの史的展開を話題の中心とし、名詞から副詞句構成さらに焦点句構成へと展開する過程から、日本語の名詞（句）と副詞（句）の関係についても議論したい。

第二部講演

連体形から見た日本語文法史

講師：青木博史先生（九州大学大学院人文科学研究院 准教授）

古代語連体形には、名詞を修飾する連体用法と、それ自身が名詞としてはたらく準体用法の2種がある。しかしながら、これらの連体形句は、必ずしも名詞句として機能しない。係り結びの結びや、接続助詞の前部に連体形は現れうる。そして、現代語の文末部は、古代語の連体形である。このように、連体形は名詞句形成に関わるだけでなく、述部や接続部で重要な機能を果たし、また歴史的にも大きく変化する。本講演では、連体形に注目することで見えてくる文法変化をダイナミックに描く。

✓ 日時：2016年3月28日(月) 午後1時00分～4時30分

✓ 場所：名古屋大学・東山キャンパス文系総合館7階カンファレンスホール

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/access-map/>)

✓ 交通案内：地下鉄名城線「名古屋大学駅」①番出口徒歩5分

入場無料・事前申し込み不要

問い合わせ：志波彩子 <shiba@lang.nagoya-u.ac.jp>